

プログラム・ノート

◆ウォルトン／『スピットファイア』前奏曲

「スピットファイア」とは、第二次世界大戦においてイギリス空軍で活躍した、楕円型の主翼が特徴的な戦闘機の名前である。特に、イギリス防衛戦「バトル・オブ・ブリテン」でその機動性の高さからドイツ空軍を圧倒したことで国民的な人気を博し、後継機“Mk. 24”まで登場するに至っている（写真）。



本日演奏する前奏曲は、イギリスの作曲家ウィリアム・ウォルトンが1942年に映画『スピットファイア』（邦題：原題：The First of the Few／米題：Spitfire）のために作・編曲し、オープニングに使用されたものである。いわゆる「国威発揚」のためのわかりやすい映画（音楽）とされる向きもあるが、独ソ戦でやや勢いが殺がれつつあったとはいえ、ナチス＝ドイツにほぼ手中に収められていた西ヨーロッパにおいて、イギリスをはじめとした連合国側においておそらく貴重な、大衆にもわかりやすい希望の象徴だった「スピットファイア」に対し、作曲者の強い思いが込められた作品となっている。

曲は金管楽器の勇壮なファンファーレに始まり、弦楽器とホルンのユニゾンで主題が提示される。この旋律は当時もイギリス第二の国歌とも称されていたエルガーの『威風堂々』を想起させる愛国的な雰囲気に溢れたものだが、それもそのはず、1937年の英国王ジョージ6世の戴冠式の際に演奏されたウォルトンの戴冠行進曲『王冠（クラウン・インペリアル）』から転用されたものである。転用前はエルガーの交響曲第1番、「ノビルメンテ・モットー」と同じ変イ長調の旋律であったという縁からも、本日の演奏会のはじまりにもふさわしい。

（I. T.）

◆シベリウス／交響曲第3番 ハ長調

1904年、フィンランド。既に交響曲第2番やヴァイオリン協奏曲を世に出し、作曲家として成功を収めていた38歳のシベリウスは、元来の社交好きが災いして社交の場へ入り浸っていたために、経済的にも創作活動的にも行き詰まっていた。見兼ねた妻アイノと、親友でパトロンでもあったアクセル・カルペラン男爵の画策により、当時住んでいたヘルシンキの北郊に位置する田園地ヤルヴェンパーに家を建てて移住するが、自然をこよなく愛したシベリウスにはヘルシンキでの都会生活より、ヤルヴェンパーでの自然溢れる生活の方が性に合っていたのか、創作意欲は見事に回復し、新たな交響曲に着手する。そうして転居3年後の1907年に完成した交響曲第3番は、それまでの作品で見られた後期ロマン派の影響や民族的スタイルは鳴りを潜め、素朴で簡潔ながらも、より洗練され、内的なベクトルの強まった作品となつた。

同年9月、シベリウス本人の指揮により交響曲第3番の初演がヘルシンキで行われたが、その2ヶ月後にシベリウスは、当時指揮者として名声を博していたマーラーと対談している。その談話の中で、マーラーが交響曲は「全存在を包括する存在」であると信じる一方、シベリウスは交響曲が「内なる動機に基づく」ことを重んずるという、実に対照的な交響曲観が明らかになった。元来からそのように捉えていたであろうシベリウスが、本作を作曲する経過においてその哲学を確固たるものとしていったことは、一度この曲を聴けば想像に難くない。

また、後述するように本作の最終楽章は、従来の交響曲で言うところのスケルツォとフィナーレの要素を併せ持った構成となっている。交響曲において最終楽章に向かう二つ以上の楽章を連続して演奏する形式は、ベートーヴェンの第5番や第6番にも見られるし、シベリウス自身も第2番でその手法を取り入れているが、彼はそこから更に進化させ、それぞれの楽章の主題が絡み合う経過

その手法を取り入れているが、彼はそこから更に進化させ、それぞれの楽章の主題が絡み合う経過部を間に置くことで、見事に二つの楽章を融合させることに成功した。この構成は、ソナタ形式楽章とスケルツォを統合した交響曲第5番に受け継がれ、ついには全楽章の要素が单一楽章として有機的につながり、交響曲という形態の一つの終着点とも言える交響曲第7番へと昇華されていく。そういう意味でも本作は、より内省的な趣を強くしていく第4番以降の交響曲や後期作品群への出発点とも言える、非常に象徴的な作品であろう。

第1楽章 Allegro moderato

ハ長調。冒頭のチェロとコントラバスによる、簡潔で音階的な並びの第1主題と、チェロが愁いを帯びて歌う第2主題、そして第2主題の後に弦楽器が駆け上がり十六分音符の主題で構成される、ソナタ形式を踏襲した楽章。展開部ではそれらの主題が次々に姿を見せ、次第に高まっていく中で力強い再現部へ突入する。その興奮が収まつたのち、幾分落ち着いて管楽器が奏でる旋律には宗教的な空気も漂い、そこに弦楽器も加わりながら穏やかな終結へと向かう。

本楽章は、シベリウスが以前に英国を訪れた際に、その沿岸から遠い海原に見た霧峰に楽想を得たと言われているが、展開部で様々な調性を経た後に再現部で訪れるハ長調ならではのカタルシスや、悠然とした心鎮まるようなコーダ部分など、霧が晴れた後の青空のような様々な表情を随所に感じる。

第2楽章 Andantino con moto, quasi allegretto

嬰ト短調の緩徐楽章。ホルンとティンパニによる五度の響きの中、弦楽器のピツィカートに導かれて、2本のフルートが断片的に主題を奏でる。次第に全容が浮かび上がってくるその主題は、印象的な挿入部を挟みながら何回か繰り返されるが、それはまるで、僅かな陽の光しか届かない深遠な森の中で行き着く先を求めながら彷徨っているよう。ヤルヴェンパーの奥深い自然に囲まれて過ごしたシベリウスならではの寂寥さ漂う楽章。

第3楽章 Moderato — Allegro (ma non tanto)

内省的な前楽章から打って変わって、晴れやかな序奏で幕を開ける最終楽章。管と弦が断片的に代わる代わる主題を提示する6/8拍子のAllegro部分は、いわば伝統的な交響曲のスケルツオ的位置づけ。軽妙ながらもどこか不穏な空気が立ち込めるこのスケルツオは、一度は嵐の様な怒涛の盛り上がりを見せるも、次第に落ち着きを取り戻し、スケルツオの主題が浮かぶ中にヴィオラによる讃美歌の主題が現れると（実はその前にもこの主題の一部が時折登場しているのだが）、4/4拍子のフィナーレ部分へと流れるように進んでいく。大いなる自然の神々しさを感じさせるこの主題が幾度となく繰り返されるうちに昂揚感は高まっていき、全弦楽器による三連符の連打に乗って管楽器が高らかに讃美歌主題を歌い上げると、最後は驚くほどシンプルな、しかし決然とした広がりを持って終止を迎える。

(J. N.)

◆エルガー／交響曲第1番 変イ長調

エドワード・エルガー。英国が生んだ最も偉大な作曲家の一人である。彼は1857年、イングランドの小都市ウスターに生を授かり、楽器商を営む父のもとで幼少期より音楽に親しんだ。独学で作曲を学ぶ傍ら、当初はヴァイオリニスト・オルガニストとして活動した。

作曲家としては遅咲きであったが、42歳で発表した『エニグマ変奏曲』によって国際的な名声を得る。続けてオラトリオ『ゲロンティアスの夢』や序曲『コケイン』なども発表し、英國一の作曲家として地位を固めていった。

1908年には念願の交響曲第1番を完成させる。この曲は熱狂を持って迎えられ、エルガーの名声

を不動のものとした。しかしながら第一次世界大戦と愛妻アリスの死は彼に深い悲しみを与え、1920 年のチェロ協奏曲を最後に大作は完成されなかった。晩年の彼は故郷へ隠居し、しばしば趣味のドライブに興じたという。1934 年没。

エルガーは当初おもに標題的な作品で評価を得たが、彼自身は絶対音楽、とりわけ交響曲が至上のものと考えていた。交響曲の完成に先立つて、エルガーは 1905 ~ 08 年のバーミンガム大学における音楽学講座でブラームスの交響曲第 3 番とモーツアルトの同第 40 番を題材に採り、詳細な楽曲分析を披露している。彼は講義の中で、ブラームス第 3 番におけるモットー・テーマの扱い——「ファ、ラ、ファ」という音列が随所に現れ、曲調を統一する役割を果たしている——に強い関心を示したとされる。同様の手法は数年後に、エルガー自身の交響曲でも全面的に採用されることになるのだが。

ここで少し楽曲の構造に触れておきたい。題名には変イ長調という調性が冠してあるが、実際に変イ長調であるのは第 1 楽章の序奏と終結部、第 4 楽章の終結部のみである。そのほかの部分は全体的にニ短調の性格が強いのだが、これは「異なる 2 つの調性を併せ持つ 1 曲の交響曲を書けるか」という友人との会話がヒントになったといわれている。

第 1 楽章冒頭、木管とヴィオラに伸びやかなテーマが現れる【譜例 1】。解説の便のため、この主題を以後「ノビルメンテ・モットー」と呼ぶことにする。これは、エルガーが好んで用いた“nobilmente”（「気高く」の意）という発想標語が付されていることにちなむ。前述のブラームス第 3 番におけるモットー・テーマと同様、この主題は終楽章のクライマックスに至るまで様々な形で現れ、全曲を統一する役割を果たしている。この楽章の主部はソナタ形式であるが、2 つの主要主題【譜例 2, 3】の合間に様々な楽句が挿入される。終結部ではノビルメンテ・モットーが再現されたのち、消え入るように幕を閉じる。



第 2 楽章はスケルツォに相当する。主部は弦楽器による無窮動な旋律【譜例 4】と行進曲風の主題【譜例 5】からなり、中間部はどこか楽しげな民謡調の主題【譜例 6】に基づく。主部と中間部のセットを 3 回繰り返すと次第に静まり、ノビルメンテ・モットーの断片が現れ、切れ目なく 3 楽章に続く。





第3楽章は非常に優美な緩徐楽章。主題【譜例7】はバスクラリネットを伴う弦楽合奏で提示される。筆者はこの交響曲の中で第3楽章の冒頭が一番好きである。バスクラリネットの低音が筆舌に尽くしがたい効果を挙げている。第2楽章冒頭の主題【譜例4】と同じ音の並びで構成されているが、まとっている雰囲気は正反対である。クラリネットやヴァイオリンの印象的なソロを挟みながら、この楽章のクライマックスに至る【譜例8】。この交響曲全体の中でもっとも初期に構想された部分で、曲全体の隠れた頂点といつても差し支えないほどに美しい箇所である。



第4楽章は第1楽章同様、序奏を伴うソナタ形式である。序奏の主題【譜例9】は第1楽章ですでにさりげなく提示されていたもの。これにノビルメンテ・モットーが絡み、不安げな雰囲気が作られる。主部はせわしない第1主題【譜例10】と颶爽とした第2主題【譜例11】が様々に展開される。最後にはノビルメンテ・モットーが全管弦楽で壮大に響き渡り、テンポを速めて一気呵成に幕を閉じる。



ノビルメンテ・モットーに対するエルガーの深い思い入れが伝わるエピソードを一つ紹介しておこう。オーケストラで弦楽器がソロを演奏する場合、最前列に座る首席奏者が担当することが通例である。しかしエルガーは第1・4楽章で何度か、ノビルメンテ・モットーを演奏するソロ奏者として、弦楽器の最後列に座る奏者を指定している。第3楽章の冒頭では通例通り弦楽器の最前列の奏者にソロを割り当てていることからも、彼が特別の意図をもって最後列奏者を指定したことは明らかであろう。

エルガーといえば一般的な代表作としては『愛の挨拶』や『威風堂々第1番』が挙げられ、オーケストラの演奏会のレパートリーとしては『エニグマ変奏曲』や『チェロ協奏曲』も親しまれている。これらの楽曲と比べると、日本での本作の知名度はまだまだ低いと言わざるを得ない。しかし筆者は声を大にして言いたい。この作品は旋律の美しさと構成の緻密さの両面で、第一級の作品に

位置付けられるべき完成度に達していると。筆者はこの曲を愛してやまない。演奏する機会に恵まれたことを心から嬉しく思う。この曲の素晴らしいところを一人でも多くの方と分かち合うことができれば、これに勝る喜びはない。

(T. I.)

=====